
Dead Drop(デッド・ドロップ)

栗須じょの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dead Drop

【ZPDF】

Z8836C

【作者名】

栗須じょの

【あらすじ】

ある機関から機密情報を盗み出すことに成功した諜報員スパロー。逃げる途中で失明した彼は、データの受け渡し地点で、クロウという男にデータを渡す手はずとなっていたが……。

(前書き)

！――警告――！

暴力をイメージする表現及び、同性愛的表現を含みます。お好みで
ない方はご注意ください。

「そこにいるのか？」と、暗闇で声がした。

声を聞いたスパローは一瞬、身構えたが、警戒するには及ばないことを思い出し、ひと呼吸の後「ここだ」と応えた。

暗闇の中の声はさらに近くなり「きみがスパローだな？」と言つた。

もちろん彼はスパロー（スズメ）だ。この部屋にはカードキーがなくては入ることはできない。自分が“スパロー”ならば、いま話しかけてきている相手は……「おれはクロウ（カラス）だ」 そ う、 “クロウ”だ。

カツカツと靴の音がひびく。いち、にい、さん…… スパローは足音を数えた。クロウと名乗る男は七歩、こちらに近づいた。

「なぜ明かりを点けない？」と、クロウは言つた。

「目が見えないんだ」スパローは答える。

「目が？」

カチッと照明が点灯する音がした。明かりが点いてもスパローの見ている世界は依然、闇のままだ。

「ひどい格好だ」

抑揚のないリズムでクロウが言つ。スパローは自分の格好を見ることはできなかつたが、おおよその想像はついていた。服の袖で鼻の下を拭うと、乾いた鼻血がぱらぱらと落ちたし、拭つた袖からは纖維の焦げる匂いがして、髪からはたんぱく質の燃えた匂いがした。それらの意味するところは、要するに“最悪”ということだ。

「データは？」

「無事だ」言つて、スパローはショルダーリュックをわずかに持ち上げた。リュックの中のハードディスクとバッカアップディスクがぶつかりあつて、がちゃつと音をたてる。

「他の仲間は？」と、クロウ。

「わからない」

スパローはそう言つたが、それが真実をはぐらかした物の見方だと知つっていた。きっと仲間は死んでいるだろ。しかし目的は果たした。その点だけが重要なポイントだ。生き死によりも。

「『陪審員』はまだか？」と、質問するクロウ。

「まだだ」

この場所での受け渡しはスパローからクロウへ。陪審員というのは、受け渡しが無事に行われたかを確認する、いわば証人のような役割をする請け負い人だ。陪審員があらわれるまで、ふたりはこの場所で待たなければならない。リュックを開けるのはそれからだ。目で時計を確認することができないスパローは、あとどれくらいで陪審員が到着するのかわからなかつた。そもそも時計が生きているだろうか？と、腕時計に耳をそばだてたその瞬間、至近距離でシユツという音がした。

“火気類だ！“感知するや否や、反射的にホルスターからグロッグを抜くスパロー。

「撃つな！」

声が叫ぶと同時に、銃身がぐいと押し下げられた。強い力にスパローの身体は前のめりになる。

「……あぶないやつだな。いつたい何だと思つたんだ？おれはタバコを吸おうとしただけだ」スパローを反応させたのは、ライターの着火石の音だつたのだ。

「すまない」言いながら、銃をホルスターに戻す。コンクリート壁の狭い部屋。こんなところでやみくもに撃てば、跳弾が自分を穿つ可能性もある。いくら銃を抜いたところで、自分は目が見えないのだとスパローは思い直した。冷静に考へるまでもなく、これはプロらしからぬ間抜けな行動だ。スパローは自分の怯えように向かつて、
“まるで女のようじやないか”と、心の中で叱咤した。
ふたたびライターをする音がし、（もちろん今度は銃を抜かなかつた）それからやあつて、ふ一つと煙を吐き出す音がした。

「ほんとうに見えないんだな？ 田をどうした？ なにがあつたんだ？」

“データは？” “仲間は？” “陪審員はまだか？” “見えないのか？” “田をどうした？” “なにがあつた？”

これまでずっと質問のされ通しだ。スパローはいささかうんざりしたが、こちらからは相手に聞くべきことはなにもなかつたし、質問に応じない道理もなかつた。

「やつらはおれたちをヘリで追つてきたんだ」 つこせつときの出来事をスパローは思い出しながらしゃべつた。

「こつちも応戦はしたが、とにかく逃げるのに精いっぱいだつた。ヘリには空対空ミサイルが搭載されていた」 それからひと呼吸おいて、「信じられないかもしれないけどね」とつけ加える。

「ミサイルで車ごと吹き飛んで……さらに悪いことに、それが高圧ガスに引火して二次爆発が起きた。それからどうやって逃げたかはよく憶えていない。田はここに来るまでは少しは見えてたんだが、今はまつたく見えなくなつた」

続けて説明すると、まるで不運のパレードだ。

「スパロー（スズメ）が、スパロー（空対空ミサイル）に撃たれた？」 クロウが言つた。

いづれ誰かがこの駄洒落を言つだらうとは思つていたが、まさかこんなに早く聞けるとは。スパローは「おもしろいね」と唇の端を持ち上げて見せ、それから再び真顔に戻つて「今度のことは普通じゃない」と、つぶやいた。

「失明は一時的なものだらう。そう心配するな」

「目のことと言つているんじやない、任務のことだ。ミサイルを搭載したヘリに追われるとは普通じやない。

「データの中身を？」

「兵器だと聞いている」

スパローは逃げる道すがら、今回の仕事が核兵器に関わるものではないかと考えはじめていた。これはいつものような銃火器の密輸や、麻薬がらみの仕事とは規模が違いすぎる。上層部は潜入先にス

パローが装備された戦闘ヘリがあることを知っていたのだろうか？今回の任務でこの「コードネーム」をつけられたのは偶然だといいが。そうでないとしたらこれは笑えない冗談だ。

「“対地上ミサイル”」

ふいにクロウは言葉を発した。

「きみが盗んだのはミサイルのデータだよ」

「ミサイル？ ラムジェットエンジンか？」

兵器に詳しいほうではないスパローでも、米軍がマッハ4以上のスピードを持つといつミサイルを開発中だという情報は耳にしていた。

「いいや、こいつはプラズマ・ミサイルだ」

「プラズマ・ミサイル？」

スパローはクロウの言葉をおつむ返すことにどまる。兵器に詳しいほうではない。クロウは続けた。

「宇宙衛星ミサイル 爆撃機にではなく宇宙衛星に搭載されるミサイルのことだ。聞いたことはないか？ 宇宙から地球上に照準を合わせれば、世界中どの都市が防備を固めたところで一発といつ兵器のことを。現在の戦争では誤爆による赤字が問題になつていて、このミサイルは衛星とGPSの使用で、誤爆を極限まで減らすことを可能にした。戦闘機に乗り込む必要すらない。コンピューターから指令を出せば、暖炉の前にいながらにして戦争に参加できるというわけだよ」

クロウの説明はどこか誇らしげでもあつたが、軍事オタクではないスパローは、この最新兵器を賛美するセンスを持ちあわせていかつた。

「核兵器の機密ではないんだな」

スパローがそう言つと、クロウは「そう簡単に核の軍事バランスは崩せんよ」と、言つて笑つた（笑つたのだ）。しかしこれが核ではないにせよ、恐ろしい最新兵器であることは間違いない。この計画が本格化すれば、世界の軍事バランスの均衡は大きな動きをみせ

るだろう。

スパローは床に座り込んだ。入り口に最新型のセキュリティ装置が設置されても、ここは朽ちた倉庫を改造した場所だ。床は汚れているだろうが構うものか、どうせ今の自分はボロボロなのだとスパローは思い、冷たく堅い床と壁に身を預ける。座り、多少リラックスの姿勢はとったが、リュックだけはしっかりと手に持つて離さないでいることは忘れなかつた。

「タバコを一本もらえないか」言つて、スパローは空に手を上げた。クロウはその手を無視し、スパローの唇にタバコを押しつける。されるままにフィルターを咥えると、キンとライターの蓋が開く音がし、それに続いてシュツと石が擦られる音がした。タバコの先端に火がつけられたことに気づかないでいるスパローに、「吸え」と短く命令するクロウ。深く息を吸い込むと、肺のすみずみまで煙が行き渡る。銘柄はキャメルだ。久しぶりに喫煙したせいか、スパローの肺はわずかに痛んだ。

「“スターウォーズ計画”か

タバコで苦くなつた舌を味わいながら、それと同じくらい苦々しく言葉を発するスパロー。この手のなかには最新の兵器が存在し、またそれは実際に使用されようとしている。一般市民のあざかり知らぬところで悪徳は着々と進行しつつあるのだ。さきほどクロウに聞くまでは、そのミサイルの存在を自分とてまったく知らなかつた。いずれニコースにのぼれば知ることになるだろうが、もちろんそうなつたときにはすべてが手遅れでもあるのだ。

じつと考え込む、スパローの考えを読み取りでもしたかのように、クロウは「人が知らないこともある」と、静かに言った。

「我々の存在が民間人に知られていないようにな」

クロウの言つ、「我々の存在」とは“人が知らない悪徳”を指すのだろうか？

「そう、これは“悪魔の兵器”だよ」まるでスパローが考えを口にしたかのように、クロウは答えてみせる。

「だとすると」スパローは言って煙を吸い、鼻から吐き出し「おれたちはさしづめ悪魔の手先というわけか？」と、言った。クロウは黙っている。

スパローの頭の中で、クロウはにやりと冷笑を浮かべて見せた。見たこともないはずの顔だが、不思議なことに彼はその顔をよく知つているような気がした。

「悪魔の手先……我ながらいい働きをしていると思うね」

スパローは皮肉に言って、タバコの灰を落とした。これが“悪魔の兵器”だからといってどうなんだ？神の救済や天国への入場チケットなど、スパローはハナツから期待していない。そもそもゲイという罪により、天国への道はすでに絶たれているのだ。それに最初に裏切ったのは、神のほうではなかつたか？

スパローは子供の頃、教会で牧師にレイプされた。牧師の言う“神の愛”が、激しく抜き差しを繰り返す最中、少年は祈つて神に助けを求めた。壁にかけられた磔刑のキリストは、荒い呼吸であえぐ牧師と、狂犬のように自分の腕に噛みついて、苦痛に耐える少年をただ眺めていただけだった。その男色行為は、少年が“かつこいい飛び出しナイフ”手に入れるまで数年に渡つて続けられた。スパローが“自分の力だけで生き延びる”ということを学んだのはそのときからである。

「目は痛むか」クロウがたずねる。

「いや」短くスパローは答える。

どちらかと“い”うと全身が打撲で痛んだが、それは黙つていた。

「みせてみろ」

言つなりクロウはスパローの顔に触れた。なんの前触れもなく訪れた接触に、思わずスパローはびくつと身を硬くしたが、クロウはそれにもかまわず、スパローの目蓋を引っ張つて目を開けさせた。

「……焼けたり傷がついた様子はないな。多少充血しているくらいだ。適切な治療をして数時間もすれば元に戻るだろう」

見知らぬ男の手はひんやりと冷たく、目蓋に当てられるときの

が良かつた。

それから「医者ではないから正確な診断とは言えんが」と、クロウはつけ加える。失明が一時的なものだとスパローも思つてはいたが、人から承認されることによつていくらか安堵した。

短い診察がおわつても、クロウはスパローから離れなかつた。冷たい手が目蓋から頬へと移動する。頬から首の後ろへ。それから後頭部へ。まるで蛇が這つてゐるようだとスパローは思つた。

なるほど、こいつは“お仲間”というわけか。ずいぶんとこちらのことを調べあげたものだ。『診てくれてありがとう。もう離してくれ』スパローがそう言おうとした直前、拒絶の言葉はクロウのキスによつて飲み込まれた。舌は歯を割つて無遠慮に入り込み、ゆつくりとスパローの歯の裏を移動してゆく。一本一本、まるで歯の本数を数えるかのような丁寧な動きだ。男の舌はまるでさつきまで飴玉をしゃぶつていたかのように甘く、その甘さはスパローの舌に残つたのタバコの味とまざつて不快だつた。口内の触診が終わると、スパローはため息と共に言葉をつく。

「ひげが……」

「ひげ？」

「ひげがない。本部で見た写真によるときみには口ひげが

「それはまたずいぶん昔のデータだな」クロウはくくつと笑つた。相手はこちらの性癖までしつてゐるというのに、こちらにあるデータは鼻で笑つてしまつほど古いらしい。聞いていた情報ではクロウはスペイン系で、言葉にはスペインなまりがあるとのことだつた。クロウの英語は完璧だ。こんな初步的なこともあてにならないのでは、潜入先の装備 へりにどんな素敵なものが搭載されているか、など のデータがないのも当然だ。

クロウの頭はスパローの首筋から胸へと潜入を試みはじめている。

“『冗談はここまで』、もちろんスパローは頭ではそう思つていた。思つてはいたが、身体の反応がそれを裏切つた。まるで水中にいるかの”とく身体が重く、動きは緩慢になつてゐる。スパローは埃

でざらついた床に手をついて、身体を支えた。あの甘い味は弛緩剤の一種なのだろうか？頭の中に薬物のデータを探すが、まるで綿でもつまれたかのように考えの動きは鈍い。身体の重みは支えきれないほどに増し、スパローは床に崩れ落ちた。その身体をクロウが抱き起こす。その手は纖細で優しく、まるで楽器を扱うかのように、スパローの感じやすい部分を恐ろしいまでの的確さで探り当ては、そこを攻める。

スパローは自分がこうした状態にあると「この」と思ふ。信じられない。この業界での彼は“プロ中のプロ”として名を馳せている。これまでいかなる状況にあろうとも、任務の遂行を第一に考え、鼻先にどんなにおいしい条件をぶら下げられても一笑に臥し、冷徹に引き金を引いてきた。仕事に私情を持ち込んだことなど一度たりともなく、ましてやこんなところでセックスに及ばなくてはならないほど、男に餓えているわけでもなく、恥を知らないわけでもない。だがどういうわけか、今のスパローは“男に餓えた恥知らず”だった。唇を吸われれば吸いかえし、まさぐれれば愉悦の声を漏らす。まるでティーンエイジャーの恋人同士のように後先も考えず欲望に身をまかせ、見ず知らずの男の肉を自分の内へと迎え入れる。

クロウのものは大きく、苦痛だった。苦痛だったにも関わらず、痛みを凌駕するほど快感がスパローを犯す。

「ああっ！くそつ！」あまりの良さに毒づき、弓のようく背をしならせる。頭の奥で光がはじけ、光は炎に変化した。炎はぐるりと地面に輪を描き、その輪の中央にはひとりの女が現れる。深紅のドレスを身につけ、豊かな黒髪を胸まで垂らした美女。女は口を動かして何か言つたようだが、音は聞こえなかつた。それから誘うような微笑みを浮かべ、ドレスの裾をゆつくりとたくしあげる。現れたのは山羊の足だ。いつのまにか女の頭は山羊へと変わつている。黄色い目は不自然なまでに大きく、ぎょろりと動いたそれは、左右あべこべの方を見つめている。

おれが見ているのは何だ？おまえはおれに一服盛つたのか？

そうスパローが発しようとするそばから、言葉は赤い花びらとなって、次から次へと唇からこぼれ落ちる。花びらは床に落ちる前に赤黒く変色して腐り、周囲に甘ったるい腐臭をまきちらした。それはクロウのキスを思わせる、しつこく甘い腐臭。

「わたしの愛する者よ。わたしの心にかなう者」

ぽんやりした頭で、スパローはその奇妙な愛の告白を聞いた。

聖書の一文を引用するには、おれたちはずいぶん遠いところにいるじゃないか？

スパローはそう言つて笑おうとしたが、身体のコントロールは効かず、開いた口からはただ唾液が滴つただけだつた。頬を流れるそれをクロウは舌で受け止め、すくいとつて、スパローの口腔に戻す。唾液は甘い。今や彼はこの味が好きになりはじめ、わかっているとばかりにクロウは何度も甘い舌を与え、スパローを激しく突き上げる。巨大なものに貫かれ、我を失いながら、スパローは遠く、笑い声を聞いたような気がした。その声はクロウのものだが、互いに唇を吸い合つて、今はどちらも笑うことなど不可能なはずだ。しかしその声は間違いなくクロウのものなのだ。スパローはその声を知つて、いるような気がした。凄惨な任務の現場で、ひとりになつた自分の部屋で、少年の頃の悪夢の教会で、いつもこの笑い声を聞いていたような気がした。

「　　おい、しつかりしる。おい？」
頬を叩く衝撃にスパローは目を覚ます。

「大丈夫か？意識は？」

言われ、スパローは声の主を見ようと顔をあげた。目に映るのは闇だけ。彼はゆっくりと起き上がり頭を左右に振つた。視力は戻らなかつたが、頭をくるんでいた霧は晴れ、自分のいる場所と置かれている状況が思い出せた。スパローが自力で上体を起こすのを見て、

声の主は安堵にため息をつく。

「死んでるのかと思つたぞ……よくここまでたどり着けたもんだ。
おれは陪審員だ。おまえはスパローだな？」

「……ああ」

口の中に砂を感じたスパローは、唾液と共にそれを吐き出す。全身に汗をかいいていたが、それはすっかり冷えていた。

「よし、ブツはどこだ？連絡では無事に持つて逃げたとのことだつたが？」

「ああ、無事に……」スパローは床を手で探つた。すぐそこにあつたはずのリュックがない。脱いだはずの衣服は着衣したままだ。

「クロウはどこだ？クロウ、きみが」狼狽え、早口に言つスパロー。

「クロウはおれだが？」

スパローにとつてまつたく聞き覚えのない声が、そう答えた。言葉にはかすかにスペインなまりが混じつてゐる。そうだ、クロウはスペイン系だと聞いていた。おやうく……口ひげもあるのだろう。スパローは嘆息した。

悪魔の兵器 “彼”はそう言つていたではないか。

灰は灰に、カサエルのモノはカサエルに、悪魔のモノは。

スパローの耳元に、蠅の羽音が低くつなりをたてる。それはクロウの笑い声のようになにか不快な響きだつた。

End.

(後書き)

最後までお読み頂き、ありがとうございました。
もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8836c/>

Dead Drop(デッド・ドロップ)

2011年8月15日03時26分発行